

Charles Dickens, *Dombey and Son* の 現実性と可動性について

宮 崎 郁 司

はじめに

本論が扱う長篇、*Dombey and Son* は George Eliot の *Middlemarch*, Disraeli の *Sybil*, Mrs. Gaskell の *Mary Barton* と並んで史家のいわゆる ‘hungry forties’ の時代的特長を具えた作品である。この時期を見舞った周期的不況は殊に Commercial depressions (流通不況) と言われ、大企業の倒産と多数の失業者はこの時期に特に顕著であった。¹この作品の主な事件の一つであるドンビー父子商会の倒産も、作者 Dickens が彼の時代と共に経験した事件であったし、労働者 Toodle, 失業者 John, 落後者 Alice などはこの時期の暗さを如実に伝える登場人物の一人でもある。また Camden Town のスラムには詐欺、窃盗、誘拐、脅迫などの犯罪が横行し、疫病のコレラが三回にわたって波状的にスラム街を襲うのもこの40年代の出来事であった。本論はこれらの歴史的社会的危機に対応した人間の危機が *Dombey and Son* において Dickens によってどのように描かれているか、主としてその方法 (method) を中心に考察を試みるものである。

鉄道労働者 Toodle の妻 Polly は Dombey 家に雇われて、生後6ヶ月の Paul の乳母となって Dombey 家に住み込むことになる。Polly にも乳飲み子があるが、生活のためには我が兎とも別れなければならない。これは家族生活の破壊的な悲劇である。経済の危機は必ず人間の危機と連結している。Dombey が労働者 Toodle に、「これまで何処で働いていたのか」と尋ねる

と、彼は次のように答えるのである。

‘Mostly underground, Sir, ‘till I got married. I come to the level then. I’m a going on one of these here railroads when they comes into full play.’²

彼がかつてその一人であった鉱山労働者も農業労働者も、従来よりももっと条件の良い就職があって大都市ロンドンへ移住するのではなくて、大部分の者は、II章で見るように元の職場を追われてやって来るのである。

Toodle と対立の立場にある資本家 Dombey は、東インド会社やイングランド銀行と提携するトップ・クラスの政商で、貿易業の経営者である。彼は個性を有する一人格として登場する反面、天体や、気候や天気までも己の支配下におくという怪物のような企業体、或いは企業制度として登場する。すなわち、人間というよりもドンビー父子商会という名の企業制度そのものである。その制度は人間が作ったものであるが、一度出来上がってしまうと、人間の手から離れて一人歩きをするしる物である。一定の時期において自分が作った怪物によって自由を奪われた人間はこの怪物とやがて対立抗争をしなければならなくなる。生存への情熱の火種を絶やさないためにもこの抗争は必要となる。*Dombey and Son* では、Polly、お手伝いの Susan、Dombey の長女 Florence など、数多くの登場人物が人間の生存を脅かす怪物と密接な対立関係を保ちながら、共通の目標に向かって運動を進めている。私は試みにこのような個人の危機克服の能力を可動性と呼ぶこととした。Dombey の二番目の妻 Edith、商会の支配人であり、かつ Dombey の右腕 ‘right-hand man’ の Carker、そして最後には Carker の手先となって働く Rob と呼ばれる Toodle の長男などはドラマティックな活躍を見せる点で、物語の中の重要な人物ではあるけれども、彼らは可動性を有していない。

I

可動性は進歩の概念であって人間存在が歴史的危機に遭遇した場合、真正

の価値を回復するために新しい秩序を求めて前進する個人力なのである。それ故、経済構造に対応する人間存在を考察する場合にのみ前進の目標としての超克すべき危機の本質が明確となるのである。そうでない場合は、前進は単なるセンチメンタルな意義しか持たなくなるであろう。例えば Dickens が経済の用語とは無関係な表現で、人間が作った制度が人間の生存を脅かす怪物となると言ったことは当時の自由主義的資本主義と歴史との関係について作者自身の考え方を表明したこと、更に言えばこの表明の方法こそ正に作者の創造的方法である点に着目したいのである。序ながら彼は次のように意見を述べて、人間と自然との現実の関係を指摘する時、この関係を経済構造に対応する諸関係の一つとして理解しないならば、ここで言う「自然」は単に抽象でしかなくなるのである。

It might be worthwhile, sometimes, to inquire what Nature is, and how men work to change her, and whether, in the enforced distortions so produced, it is not natural to be unnatural.³

本来、生と労働との根源であるべき自然が、或る方法で変えられてしまったために、‘不自然である’ことが‘自然である’ことになってはいしまいかという、この価値の倒錯に関する問いかけは明らかに作者自身の言葉であり、読者の時代に対する応答の反映である。これらの言葉はまた反面には、読者の意識に様ざまの反応を促がす効果があるところから、Dickens は *moralist* と言われたり、時として *idealist* と呼ばれたりする。この長篇小説、*Dombey and Son* が *Pride* の小説であると言われるのも、*Pride* は成敗されなくてはならないという *idealist* と同じ考えの現われである。また *moralist* にとっては既成社会の秩序が思考と行動の重要な規範となる。これに反して作者の作中の直接的な言葉は、毎日を苦しんで生きている同時代人びとの経験を表わす一つの形式として小説の構造の重要な因子となっている。この物語では鉄道、貿易商社は *Camden Town* を中心に起った大地震と共に既成秩序の破壊をもたらす。作者の言葉がこれらの無秩序と混沌の向う側に庶民が新秩序

をうち樹てる可能性に言及していることは何にもまして重要である。

上の引用文は別の意味では、歴史的な危機—庶民の生活と制度との対立関係が極度に緊張する時期—に際して庶民の可動性を促がすための作者自身の干渉でもある。だが干渉は作者の言葉だけではなくて、plots の構成にも、現実描写の場面や情景の選択にも作者の干渉が見られる。そしてそれによって庶民の結束性 (solidarity) が見出されていくところにこの作品の歴史的な意義があると思われるのである。また *Dombey* 家のお手伝いの Susan Nipper が今は鉄道社宅に住んでいる Polly を訪ねたり、落後者の Alice と除け者の Harriet が出会う行為は一見奇遇であるが、これらの情景を支えるものは怪物に屈しようとしなない強い生命力であり、庶民の連帯感であり、愛情であり、さらには宗教的信仰であった。

真の自由すなわち怪物からの解放という勝利を手中に収めるための進歩の道程はまことに長いのであるが、多くの苦難を超克して、結局資本主義制度が破壊した以前の自然が、換言すれば、真の人間と自然との関係が、庶民自らの行動で回復するところとなる。それ故 *Dombey and Son* は庶民の結束性 (solidarity) の小説であり、作者の言葉は新しい世界を樹立し、真の価値を回復する予言者的構造を有するものであるとすることができるであろう。

II

Dickens は大都市ロンドン、鉄道、企業制度は怪物であるという。自然を追われた農民やその他の労働者はロンドンに流れ込む以外に生存の道はしゃ断されている。農産物価格が下落して工業製品の価格が騰貴すると地主たちは従来通りの生活を維持するために農業労働者を搾取するほかないのである。また炭坑労働者は毎年1400人の抗夫の命を奪っている炭坑の爆発やその他の災害から命を守るためにはロンドンに移住するしかないのである。⁴怪物は次のように描写される。落後者たちはおびたしい数の群をなして町へ向かって進んでいく。Harriet が彼らを見守っているところである。

She often looked with compassion, at such a time, upon the stragglers who came wandering into London, by the great highway hard by, and who, footsore and weary, and gazing fearfully at the huge town before them, as if foreboding that their misery there would be but as a drop of water in the sea, or as a grain of sea-sand on the shore, went shrinking on, cowering before the angry weather, and looking as if the very elements rejected them. Day after day, such travellers crept past, but always, as she thought, in one direction—always towards the town. Swallowed up in one phase or other of its immensity, towards which they seemed impelled by a desperate fascination, they never returned. Food for the hospitals, the churchyards, the prisons, the river, fever, madness, vice, and death,—they passed on to the monster, roaring in the distance, and were lost.⁵

ロンドンはそのこに入ってくる全ての旅人をくらい、滋養を摂取する恐ろしい怪物である。その描写の方法は登場人物の背景描写のそれではなくて生活環境を人物として描く方法である。ロンドンには犯罪者や、精神や肉体が棄損された人間を作り出す。前科者の John を弟に持つ Harriet は針仕事で細ぼそと暮しをたてている女性である。ここに描かれるロンドンの息づかいは背景描写ではなく、人間を相手にドラマに参加する登場人物である。これもただ単にその残虐性だけが描かれるのであるならばこの描写は、支配人 Carker が機械に巻き込まれて死ぬ場面や、*David Copperfield* における Steerforth の死体の発見の場面と同様、sensationalism の技法の一つに数えられてよいであろう。⁶だがその扱いは木を見て森を見ない類の批評である。

Mr. Toodle はこの怪物と戦うだけの勇気と自覚を持った人物の一人である。彼は機関車に乗って機関助手を務める労働者であるが、彼は仕事に自信と喜びを持ち、長男の Robin を bailer と呼んで得意になっている情景が見

られる。また *Dombey* がポケットからお金を出して彼に与ようとした時、彼はこの施物をきっぱりと断わる情景に感情の構造 (structure of feeling) がある。Toodle は怪物に屈せずこれを乗り越えて労働者の新たな世界を築き上げていく。F. R. Leaves がこの小説で最も重要な役割を演じているのは The Toodles であるとまことに示唆に富んだ指摘をする。⁷ この作品を知性の記録として評価されるのは、この作品にはそのような The Toodles と *Dombey* との交渉の歴史と見られる一面があるからである。

ある日のこと *Dombey* の長女 Florence が川岸を歩いている時、干潮時の川底の泥から鉄屑や、かけらなんぞを捨てている John という男に出合った。彼は古船の修理であれ庭仕事であれ頼まれたら何でもする。彼のすぐ傍でボロ衣をまとった少女が一人たたずんでいる。見ると肩の均衡が取れていない。不具なのだ。父は娘に優しく話しかける、「Martha! この美しいお嬢さんに一こと言いなさい」。⁸ この男は妻を失なって10年このかた娘と二人暮らし、と言うよりも娘のために働いている強くて優しい感情の持主である。Florence はこれと対照的な自分と父との関係を意識せずにはいられなかったであろう。別れ際に彼女は John の手の近くにそっと一枚の coin を置いて立ち去った。その手は泥だらけの手と握手を交わしたのと同じ心暖まる手であった。真の価値を意識するもの同志の手である。Florence はそうせざるを得なかったし、父と娘も受取らざるを得なかったほどのぎりぎりの状況にこの両者は置かれているのである。

次に挙げる怪物は夜、霧、雨、寒さと風である。Alice はドンビー父子商会の支配人 Carker のかつての妻であったが棄てられ、罪を犯し、流刑囚となって海の向うで暮して12年を経、漸く着のみ着のままの姿で、ロンドンに帰りついて来た。彼女は体力のすべてを消耗した墮落と孤独の女性である。Harriet が針仕事の手を休めて見るともなく窓越しに、夜の戸外にたたずむ Alice の影を認めるのである。

Her fallen sister came on, looking far before her, trying with her

eager eyes to pierce the mist in which the city was enshrouded, and glancing, now and then, from side to side, with the bewildered and uncertain aspect of a stranger. Though her tread was bold and courageous, she was fatigued, and after a moment of irresolution, sat down upon a heap of stones; seeking no shelter from the rain, but letting it rain on her as it would.⁹

Harriet は手内職で細ぼそと暮しを立てている女性である。弟の John が前科者であるため、まともな交際をする人がない。いわば社会の除け者である。罪がこの姉弟を世間から隔離してしまう。闇と霧と雨が彼女の住まいを包み込むのである。Alice と彼女の間を 'sister' で表わすのは作者の問題的な人間の見方である。霧は人間と人間を切り離し、闇は人間の進路を騒き消してしまう。飢えと疲労は生きる力を奪わんとするが、温かい血の通う別の人間の心が一人の人間を救う。'sister' によって示される信仰が怪物の手を払いのけて人間を救済する。作者は孤立する人間と人間とを結ぶ力を宗教に求めていることは明らかである。

III

次の monster は鉄道である。この monster には二つの側面がある。一つは Dombey が the Major (退役軍人) を伴って旅行する時の汽車である。ドンビー父子商会は貿易業界では今、日の出の勢いで繁栄している。この時、彼を乗せて走る汽車は、「金切り声を立て、吼え猛り、轟音を響かせ、後ろに残るのは砂塵と蒸気だけである。まるで良心の科を知らないで走り抜ける死神の怪物のようである」。この怪物は慣習や秩序、価値観をもじゅうりんしないではおかない。これに対してもう一つの汽車は Camden Town のスラム街を突き抜ける汽車であって、破壊の音を立てながらも、同時にその音は建設の槌音にも聞こえて来る。混乱の後に続く新秩序を想わせる汽車である。

There was no such place as Staggs's Gardens. It had vanished

from the earth. Where the old rotten summer-houses once had stood, palaces now reared their heads, and granite columns of gigantic girth opened a vista to the railway world beyond. The miserable waste ground, where the refuse-matter had been heaped of yore, was swallowed up and gone; and in its frowsy stead were tiers of warehouses, crammed with rich goods and costly merchandise. The old by-streets now swarmed with passengers and vehicles of every kind: the new streets that had stopped disheartened in the mud and wagon-ruts, formed towns within themselves, originating wholesome comforts and conveniences belonging to themselves, and never tried nor thought of until they sprung into existence. Bridges that had led to nothing, led to villas, gardens, churches, healthy public walks. The carcasses of houses, and beginnings of new thoroughfares, had started off upon the line at steam's own speed, and shot away into the country in a monster train.¹⁰

この頃 Toodle が乗っていた機関車は Birmingham・London 間を走っている。この日も高価な商品を満載した車輪付きの倉庫（貨車のこと）をけん引して彼は走っているかも知れない。同時にまたスラムは鉄道の敷設によって造成・整地されて昔日の Staggs's Gardens の悌はすっかりなくなっているのである。彼と家族はそこに新しく建てられた鉄道社宅の Building に住んでおり、子供はその後更に4人生れて合計9人になったという。鉄道はまた労働者の為に機関夫 'engine cleaner', 信号手 'flagman' というような職種を作り、労働者は技術職種を通じて自らに自信と喜びと誇りを持つようになってくるのである。ある日偶然 Dombey が Toodle に会ったとき、不自由だろうと言って幾らかの金を差し出したところ、彼は、「要りませんやね、わたちはどうにか暮していきまあ」と返事するのである。鉄道は一方において破壊を推し進めながら、他方では、労働者に何か新しい価値を経験させ

ており、それが彼に同情を受けることを拒絶させることとなる。川ざらえの男が Florence の施しを受けなければならない状況と Toodle が庶民の失ったものを回復しつつある過程の情景はこの小説の reality を支える。そしてこの reality の中で the established world と the world of possibility との交渉の二面性が歴史的発展の異なる段階として経験されているのである。

Dombey が Polly Toodle をわが子 Paul の乳母に雇った時、給料額、住込の条件などを取り決める際に Polly を Richards と呼ぶことを彼女に同意させる。Paul は未来のドンビー父子商会そのものであるから、女性には商会に関係させたくないというのが彼の信念なのである。ある日 Dombey 親子が Sol Gills に救済資金を貸す問題を論じていた。Paul が、「貸してあげてください。Florence もそう思っています」と言うと、父は叱りつけるように、「女の子は Dombey and Son には関係ないことだ。貴男は貸してやりたいのか」と言うのである。¹¹ 次に見るように、そのドンビー父子商会もまた怪物である。

Dombey は乳母の Polly に男性固有の名前を強制した。彼は Florence の存在や意見を一切無視した。これだけであるならば彼の pride は男性優位、女性蔑視の思想の上に築かれた偏見でしかない。心ある読者は Dickens がこの小説で探求し、発見しようとするものはそのように単純な処生観から生まれるものではなくて、もっと深い所に根を張っており、究局的には人間の生存を危機に陥れる一つの思考形態であることを認めるであろう。ここで大切なことはこの小説はその思考形態の元で人間はどのような世界観を持っているかということをお我々に教えるのではなくして、次に見るように、この小説はその思考形態をどのようにして見出すかという発見の方法を提示することである。「怪物」という提示の仕方にその一つが見られる。

IV

怪物の力を究明するのに二つの道があることが読者にわかるのである。そ

の一つは人間を支配する力であり、もう一つは自然への支配である。F. R. Leavis は *Dombey* の性格を分析して彼は功利主義者であると言う。確かに Leavis の所説は *Dombey* の本質を突くものである。だがこの小説においてもっと重要な点は、知性的な位置づけよりも、*Dombey* を描く方法であろう。

Upon the Doctor's door-steps one day, Paul stood with a fluttering hearts, and with his small right hand in his father's. His other hand was locked in that of Florence. How tight the tiny pressure of that one; and how loose and cold the other!

Mrs Pipchin hovered behind the victim, with her sable plumage and her hooked beak, like a bird of ill-omen. She was out of breath—for Mr. Dombey, full of great thoughts, had walked fast—and she croaked hoarsely as she waited for the opening of the door.

'Now, Paul,' said Mr. Dombey, exultingly. 'This is the way indeed to be Dombey and Son, and have money. You are almost a man already.'¹²

この寄宿学校は企業に適わしい経営者を育て上げることが期待される所であった。父と姉の Florence に手を引かれて学校の入口に立った Paul の年齢は僅か6才であった。*Dombey* 自身の口から、この学校は Paul が企業体となって財の積み上げに通じる道であると言う。知性史に通じている読者ならば John Stuart Mill が父の James から功利主義の幼児教育を受けたという史実を思い出すに違いない。だがこの引用句はそれ以外に大切なことを一つ語りかけてくるのである。Paul が父の手に感じた冷たさは、どう見ても人間の血の通う手から伝わるものではないのである。姉の手の温かさに較べて、この冷たさは、*Laissez-faire* の経済制度の息ぶきを伝えるものであろう。

産業と経済の制度は人間ばかりではない、自然をも支配するのである。大自然はドンビー父子商会のためにあるというのは、作者の当時の *Laissez-faire* の経済活動に対する冷笑、非難なのであろうか。次の章句を調べてみ

よう。

The earth was made for Dombey and Son to trade in, and the sun and moon were made to give them light. Rivers and seas were formed to float their ships; rainbows gave them promise of fair weather; winds blew for or against their enterprises; stars and planets circled in their orbits, to preserve inviolate a system of which they were the centre.¹³

地球も太陽も一私的企業の利潤追求のためにあり、天体はドンビー父子商会を中心にして運行する。当時この物語りの部分を読んだ人はかくまで自然が人間から隔離されている状況を説き明かされて、戸迷ったかも知れない。一方に富の蓄積があり、それに応じてスラム街の悪徳と疫病に対する無関心の度合いがそれだけ高まる。自由主義的資本主義の内部矛盾がどんどん拡大されて行く。作者は怪物を通じて歴史的な危機を説き、危機克服の必要を訴える。彼は制度的な行動が人間の手から *the physical world* を奪い去ることによって、人間は自らの主体性を喪失してしまったことを慨嘆するのではなく、奪い去られたものを取戻すことを庶民の行動に強く訴えているのである。この訴えの中で作者が描く人間と物質世界との真の関係がこの作品の *reality* を創造的なものとしていると言えるであろう。

だが時として一個の人間に戻る *Dombey* は一沫の衰れをさそう。前妻と死別した悲しさが彼の精神をいためつけており、それを人に悟られたくないという劣等感のようなものが、折に触れて彼を傲慢にするのであろう。次の引用文は、その傲慢が馬に蹴とばされてしまうという *caricature* 描いている。

But Mr Dombey, in his dignity, rode with very long stirrups, and a very loose rein, and very rarely deigned to look down to see where his horse went. In consequence of which it happened that Mr. Dombey's horse, while going at a round trot, stumbled

on some loose stones, threw him, rolled over him, and lashing out with his iron-shod feet, in his struggles to get up, kicked him.¹⁴

長男 Paul の夭折、第二の妻と支配人 Carker の駆落ち、路上の落馬、Florence の家出、持船 *Son and Heir* 号の行方不明、証券投機の失敗は遂に House of Dombey and Son を倒産に追い込み、Dombey 自身も破産者公報に名を連らねることとなる。Dombey の倒産は決して作者の勧善懲悪の態度が作り出したものではない。何故ならば倒産したのは一個的企業であって Dombey 個人ではないからである。

V

Alice は Harriet の救いの手に導かれる。そうでなかったなら路上で変死するところであった Alice と Harriet とは心の絆でしっかり結ばれる。病弱の Alice の最後の日が来た。Harriet は聖書を読んで聞かせる。Alice は臨終の床でイエスの言葉をつぶやく。「山上の垂訓」に従って貧しい Alice は天国に入る。この Harriet の救いの手は Dickens のものと考えられるが、作者の手にはもう一つの手がある。その手は自由の国へと庶民を導く手であり彼らはそれに導かれて必ず未来へ進む。未来には天国か、さもなくば人間と自然が真正の関係を保っている自由の国があるのである。Alice は 'a fallen woman' ではあるが、Dickens が描くときは、彼女の頬に生気が消えた瞬間から天国に向かって彼女は進む。人間には未来へ向かって進む、あるいは未来に何かを築こうとする生得の力がある。それは自らの力で可能性の世界を拓く行動という形式をとって現われる。

Florence は父に殴打され、床に叩きつけられたので発作的に家を飛び出してしまふ。いつの間にか彼女の足は Solomon Gills の店、Midshipman に向かっていた。街頭は太陽に輝いていたが、彼女の心は冬の夜の暗さに包まれていた。彼女はあてもなく飛び出したがこの場合、'house' と父を棄てた意味は深い。棄てた家を home 言わずに house と言う。Dickens の言葉

にその理由を聞くと、

Florence, who had hoped for so much from this marriage, could not help sometimes comparing the bright house with the faded dreary place out of which it had arisen, and wondering when, in any shape, it would begin to be a home; for that it was no home then, for anyone, though everything went on luxuriously and regularly, she had always a secret misgiving.¹⁵

this marriage は貴族の娘 Edith と父との結婚を意味する。住む家は堂々とした家であっても家庭がそこにいることを寂しく思っていたまだ物ごころも付かない少女にとって、新しい母に大きな期待をかけていたのであるが、遂に家庭は彼女には訪れることはなかった。home が無いことを悲しく思ったのは一人 Florence だけの sentiment ではなく、この時代の風潮であったことを Dickens は語ってくれる。当時の人々は ‘house’ という言葉に人々の時代的感覚を托していた。商店とか会社を表わす例として House of Dombey and Son は普通の用法であるが、‘a corner house’ (角家), ‘a stuccoed house’ (白壁の家) にいたっては当時は当世流行の家らしく、こういう家に入居する人々の得意な顔が容易に想像できる。Dickens によれば、a beef-shop から ‘the Excavator’s House of Call’ ができたり、古くからある Ham and Beef Shop が ‘the Railway Eating House’ と改称する有様だったということである。Paul が預けられた寄宿学校の Blimber 先生は hothouse (温室) の栽培が趣味であった。¹⁶ 父兄が hothouse の熱元を煽っている描写は塾の機能と合せ考えて大変 ironical である。一つの家は Dombey にとっては the stately house である。¹⁷ 同じ家が Florence にとっては the great dreary house なのである。¹⁸

So Florence lived in her wilderness of a home,¹⁹

home の無い家は荒野にも等しい。

Sol Gills が失そうして以来その店を預かっていた Captain Cuttle のとこ

るへ、家出をした Florence が逃ごむように来て置まってもらうことになる。幼い頃、Susan Nipper に連れられて、Paul の乳母であった Polly Toodle (Richards の本名) をたずねて Camden Town へ行っての帰路のことである。路上のどさくさ騒ぎに巻き込まれて Susan からはぐれた Florence は怪しい老母に誘拐され、身ぐるみはがれて路頭をさ迷っているとき、Walter Gay という少年に救われる。Sol Gills の甥である。Walter は彼女を連れて Midshipman へ帰ってきた。この店は船舶器具製造販売店である。Florence はあれから10数年が経ったいま、再びこんどは、‘homeless wondering fugitive’ としてこの店へ逃げて来ることとなった。

Walter は叔父の Sol Gills から教育を受けて成長し、当時はドンビー父子商会に勤めていたのである。ところが支配人 Carker の悪らつな術策にかかって海外出張をさせられることになった。やがて商会の持船 *Son and Heir* 号に乗って航海に出たまま行方不明になる。Sol Gills は可愛がっていた甥を探し出すために単身で航海に出てしまう。やむをえず留守を預かることになった Captain は店員の Rob と一諸にそこで暮らすことになる。Rob は Charitable school で歪んだ教育を受けてきたので Captain が教育をしないおそうとするが、もう詐欺師的な習癖を身につけてしまっていて矯正の見込みがない。彼は Florence がここへ逃亡してきた頃は Carker に雇われて、‘eaves-dropping’ (盗み聞き) の役を引き受け、すでに Carker の手先となって働いていた。

航海中行方不明の Walter は生きていた。Captain と Florence はこの報せを受けて Midshipman は喜びに湧く。やがてしばらく日をおいて Sol Gills も帰ってくることになる。この現実からこの物語の世界は歴史的未來へと発展していくのである。Midshipman の世界は Dickens の手に導かれて moral world へ入っていく。しかしこの世界は具体的な制度のもとで庶民を受け入れ、そして彼らの幸福がそこで保障されるというような世界ではない。この小説では未來の世界は描かれない。何らかの新しい制度によって

人間の生活が保障される世界は描かれない。ただそのような新しい秩序が支配する世界が到来する可能性のあることが告げられるのである。

Essex の故郷で暮すようになっていた Susan が Polly を誘って Midshipman に集まってきた。Dombey の家族とつきあいのあった Mr Toots は Midshipman のこの動静を何もかも知っている。旧知が皆揃ったあたりで Florence と Walter の婚約、ついで古くから顔見知り同志の Susan Nipper と Mr Toots も婚約する運びになる。

これらの人々は古い習慣となった制度の重圧に耐えながら受難の道を離ればなれに歩んできた人々である。若しドンビー父子商会のような企業制度がこの世から全て消滅したとしたら、世の中の全ての人々はみな Midshipman に集まる人びと、すなわち Florence, Walter, Sol Gills, Captain Cuttle, Susan, Mr Toots, 及び9人の子供を産んだ Polly Toodle 等と同じ経験をすることだろう。またその上、この人々は今後とも孤立することはないである。こうしてこの人たちは生得の資質である可動性がもたらした新しい人間関係に入ることができたのである。この人間関係から彼らはさらに第二次の行動をおこして真正の価値の回復に向かって前進するかも知れない。作者は真正の価値の回復が可能であることを予言者として開示した。即ち太陽、海、雨を、さらに星の運行に至る、全自然を独占した *Dombey and Son* のような企業制度はすでに崩壊したし、またその過程で描かれた権勢を排し素朴を象徴する a wooden Midshipman に参集した人々の行動の中に未来の秩序を志向するエネルギーとしての可動性が確認されるにいたるのである。

む す び

Florence 夫妻は髪の毛がすっかり白くなった父を引取って面倒を見ることになった。Florence は男の子と女の子をもうけた。祖父になった Dombey は二人の孫をわけへだてなく大事に扱い、大変可愛いがった。ある秋の日、浜辺の近くを4人がそろって散歩する情景を一部引用しよう。

The white-haired gentleman walks with the little boy, talks with him, helps him in his play, attends upon him, watches him, as if he were the object of his life. If he be thoughtful, the white-haired gentleman is thoughtful too; and sometimes when the child is sitting by his side, and looks up in his face, asking him questions, he takes the tiny hand in his, and holding it, forgets to answer.²⁰

昔、寄宿学校の入口で Paul が感じた Dombey の手のあの冷たさは感じられなかったに違いない。孫のあどけない問いかけに腰を屈めて答えてやっている Dombey の姿を眺めて誰かほのぼのとしたものを感じない人があろう。何と和やかな環境。心の中に 'house' を否定して 'home' を取戻した人間の姿がそこに描かれるのである。「孫は人生の目的である」かのように白髪の Dombey は孫を見守るのである。見守る彼の眼は作者 Dickens の眼であり、この作品を貫く moral である。

Dombey's house における大宴会は豪華けんらんで、George Eliot の *Middlemarch* にもこの種の盛大な催しを見ることができる。これらに対して Dickens は 'wooden Midshipman' で庶民のパーティを開いていることは見逃がせないことである。極くつつましやかな、だが数人の子供が混じった会合は明るくて温かくて希望に燃える世界を語り伝える。Dombey and Son が人間から取り上げた自然、換言すれば物質と人間との正しい関係が戻ってきたのである。*Middlemarch* の労働者 Timothy は無知もうまいであった。それ故 Ladislav という指導者が出て政治に携わり、社会を改良して労働者を救おうとする。*Dombey and Son* にあっては人間を救うのは庶民の可動性である。Dickens は予言者として真正の価値を回復するいわば庶民の生得的力能に訴えている。作者が Dombey は怪物であると言うときは Dombey and Son という企業体を指すのである。Dombey が一子 Paul に「この道はあなたが商会となって金をもうける道だ」と学校の入口を指さしたとき、それは Dombey が言っているのではなくて、Laissez-faire の資本

主義が特定の間人を選んで彼にそう言わせているのである。そしてその制度の崩壊とともに太陽や海、山を独占し、世界の富を獲得する‘monster’がついに倒れるにいたった。作者は古い自由を新しい自由を置き替えた。新しい自由は怪物から逃れる自由であった。George Orwell は Dickens は現行の制度の非難はするが、新しい理想的な制度の提案をしないともらしている。²¹しかし *Dombey and Son* においては Dickens は革命家ではない。彼は自由の王国が当時の歴史的危機を経験する人びとの手によって実現される一つの可能性を提示したに止まる。即ち *Middlemarch* における George Eliot は社会変革の指導者であり、*Dombey and Son* における Charles Dickens は人間変革を唱える勝れた民族の指導者であると言うことができるであろう。

以上で論考したように、物語における作者の干渉の方法は庶民の可動性を創造した。それは Dickens が直向きになって、生存への情熱、若々しさ、愛、とりわけ「喜びを知る能力」など、多くの大人が忘れてしまった生得的能力を説く方法の中で読者が見出す構造である。また「山上の垂訓」が Harriet と Alice とを結んだように、棄損された個人として集団から孤立した人間に対して宗教的干渉が行なわれることについてさらに付言しておきたい。*David Copperfield* のあの廢船の住み家で、実の子のように愛の手で育てた Emily を失なって絶望する Mr Peggotty を慰める Mrs Gummidge が口にするのは、『マタイによる福音書』の「これらの最も小さい者のひとりにしたのは、すなわちわたしにしたのである」であった。²² 愛の実践が貧者の家庭を象徴する廢船内で営まれる共同体を破壊から守ろうとするのである。

注

- 1 Sidney and Beatrice Webb. *History of Trade Unionism* (London: Longmans Green, 1950), p. 180.
- 2 Charles Dickens, *Dombey and Son* (Harmondsworth: Penguin Books), p. 70.
- 3 *Ibid.*, p. 737.

64 Charles Dickens, *Dombey and Son* の現実性と可動性について

- 4 エンゲルス, 『労働者階級の状態』, 武田訳, 新潮社, 252頁
- 5 *Dombey*, pp. 562-3.
- 6 Walter Phillips, *Dickens* (London: Russell & Russell, 1962), p. 14.
- 7 F. R. & Q. D. Leavis, *Dickens* (London: Chutto & Windus, 1970), p. 25.
- 8 *Dombey*, p. 425.
- 9 *Ibid.*, p. 563.
- 10 *Ibid.*, p. 289.
- 11 *Ibid.*, p. 197.
- 12 *Ibid.*, p. 208.
- 13 *Ibid.*, p. 50.
- 14 *Ibid.*, p. 689.
- 15 *Ibid.*, p. 592.
- 16 *Ibid.*, p. 234.
- 17 *Ibid.*, p. 392.
- 18 *Ibid.*, p. 393.
- 19 *Ibid.*, p. 395.
- 20 *Ibid.*, p. 975.
- 21 George Orwell, *essays 1920-40* (Harmondsworth: Penguin Books), p. 457.
- 22 *David Copperfield*, Dickens' works vol. III, (New York: Peter Fenelon Collier & Son), p. 34.

Synopsis

On the Reality and Mobility of *Dombey and Son*
by Charles Dickens

Junji Miyasaki

It is significant that, in *Dombey and Son*, Dickens displays a small party of common people held at the humble wooden house of 'Midshipman'. They are Florence, daughter of Paul Dombey; Walter, a clerk expatriated from the counting house of Dombey and Son; his uncle, Sol Gills; Captain Cuttle, a friend of Sol Gills; Polly who was once employed as a wet-nurse to little Paul; Susan, a nurse of Florence, and others. They are indifferent to reputation, monetary gain and social ambition. Among them the most remarkable is Florence who runs away from her dreary house to the Midshipman's as 'a homeless wandering fugitive'.

The method by which the relationship between man and institutions is described is a Dickens's creation at a critical period of value consciousness in England. The institutions are depicted as Monsters; railroads are a monster whose 'way, still like the way of Death, is strewn with ashes thickly'. London is a monster to whom the travellers 'passed on rearing in the distance, and were lost'. Dombey and Son is a monster who controls the weather, the seas, and even the sun and the moon.

The bankruptcy of the firm of Dombey and Son has, in effect, liberated those who had been fettered by the monster of the free enterprise system. It is realized, at last, that common people have been deprived

of any conventional identity; they are free from any customary sacrifice. Paradoxically, the method of Dickens's creation shows that redemption and affection would emerge from mobility inherent to common people. The prophecy of mobility verifies the reality of human afflictions under the unprecedentedly difficult circumstances in ways more acute than customary characterization can.

In consequence, *Dombey and Son* is a novel of human liberation; in social life, Dickens looks forward to what Marx does in political life. He does not insist on the necessity of social reform as George Eliot does in *Middlemarch*; he prophesies the change of man to come.